

おわりに

『獄中ノート』完全復刻版(全18巻、2009)および国家的事業としての全著作のナショナル・エディション(国家版)の刊行開始によってグラムシ研究は新しい段階に移行しつつあるといっても過言ではない。『ノート』校訂版(1975)は全4巻であったが、復刻版は全18巻と充実した内容であり、各「ノート」のみならず、各重要草稿もその執筆時期、背景など詳細な執筆過程が述べられており、「ノート」の作成過程や「外部」(とくにコミンテルンの動向やソ連におけるスターリニズムの進行など)との関係など、より正確に理解できるようになった。「復刻版」編者のフランチョーニはグラムシの独房を「グラムシ工房」と名付けたが、「工房」での「ノート」執筆におけるグラムシの探究がリアルに描かれている。「未完の市民社会論」という着想も『ノート』校訂版および復刻版検討のなかから生まれてきたものである。

しかしながら、本書で取り上げることのできなかったテーマも少なくない。とくにN・ボッピオの市民社会論およびJ・テクシェとの論争についてはグラムシ市民社会論への関心を惹起した論争であり、早い時期に筆者の考えを述べたいと考えている。ボッピオ、テクシェ両氏はすでに他界されているが、復刻版を踏まえればこの論争の意義を継承しつつグラムシの見解をより正確に提示できるのではないかと考えている。同論争は1967年のグラムシ研究会議でのボッピオ報告にたいするテクシェの批判から始まったが、当時は『ノート』校訂版(1975)も未完で、依拠するテキストは「トリアッティ版」と称される『グラムシ選集』(全6巻)であり、したがって両者の論争の文献的基盤は不正確なものであった(同『選集』は校訂版のような3種類の草稿の区別と関連はなされなかった)。また本文でも簡単に触れたが復刻版における「マルクスへの回帰」(マルクス文献の翻訳パート)の意義をふまえれば両者の論争はより建設的なものになったであろうと考える(ボッピオ論文については共訳『グラムシ思想の再検討』第2章、お茶の水書房、2000、を参照されたい)。

この間の筆者の研究は『ノート』復刻版および関連文献の検討に迫られて「日暮れて道遠し」を痛感する日々であったが、グラムシに関心のある各分野の方々の激励と多様な教示のおかげで、グラムシ生誕130年の年に本書を上梓することができた。イタリア経済・社会史全般について数々の教示をいただいた尾上久雄先生も他界され、また市民社会論とグラムシとの関係について貴重な教示をいただいた平田清明先生、山口定先生も故人となられたが、重要な視点が含まれており、今後さらに掘り下げたいと考えている。また市民社会論との関係でアソシエーション論の重要性についても田畑稔、大谷禎之介両氏の著作から重要な教示を受けた。

グラムシ研究所(ローマ)や国際グラムシ学会(IGS)の研究会などで長年にわたって交流のあったJ・ブッティジ氏(ノートルダム大学)も残念ながら他界された。彼は地中海のマルタ共和国出身で、グラムシの「サバルタン・ノート(第25ノート)」の重要性に早くから注目した優れた研究者の一人であった。慎んで御冥福をお祈りしたい。拙稿に対して度々有益なコメントを寄せていただいた伊藤晃、千葉眞、吉田傑俊、聴濤弘、田畑稔、堀雅晴、藤岡寛己、長野芳明(順不同)の諸氏に深く感謝します。またイタリアの研究動向や社会・政治状況について貴重な教示を受けた三宅俊夫氏(ヴェネツィア大学)、田中智子氏(ローマ大学、故人)、石田泰氏(トスカーナ日本人会、故人)にも深謝します。

グラムシの1年後に生まれ、グラムシが没する10年前に自死した芥川龍之介(1892-1927)は「危険思想とは常識を実行に移そうとする思想である」(『侏儒の言葉』)と述べているが、グラムシはかつてマキアヴェッリがそうであったように、「常識」の実現のみならず「常識」の変革をも志した思想家の一人であったといえよう。我が国の為政者には主権者たる国民の「常識」さえ無視する「愚民的国民観」が根強いのではと感じることが少なくないが、『広辞苑』ではこれについて「為政

者が民衆を無知の状態に陥れてその批判力を奪おうとする政策」と述べている。また白川静『字統』(平凡社)によると、国民・民衆の「民」とは「目を刺している形」であり、「一眼を刺してその眼力を害し、失わせること」とある。人々の視力・判断力を奪うような愚民観を打破するための「知的改革」、「等価性の連鎖」(ムフ)、「他者のリスペクト」(中野晃一)に基づく「常識＝良識」の形成が求められる時代といえるのではないだろうか。グラムシの「未完の市民社会論」がそのような「常識＝良識」形成の一契機となることを心から期待したい。皆さんの率直な御意見、御批判をお願いします。

文末ながら、あけび書房の岡林信一代表には本書の企画・構想の段階から大変お世話になった。グラムシ研究者として社会に「何を発信するか？」という点について同氏から鋭い問いかけをたびたび頂いた。同氏の熱意に感謝したい。

『獄中ノート』復刻版に続きナショナル・エディション(国家版)の『獄中ノート』も刊行開始された(現在は第1巻のみ)。また『獄中からの手紙』の新版も出版された。文献・資料の充実を踏まえて「静止画像」的でもなく「単性生殖」的でもないグラムシ像の探究に微力を尽くしたいと考えています。